

日本ライン下りの復興を目指した施設の提案

- 観光事業と市民活動の融合施設 -

岐阜県立国際たくみアカデミー
職業能力開発短期大学校 建築科

杉田 和直

1. はじめに

美濃加茂市における有名な観光といえば「日本ライン下り」を思い浮かべる人が多いだろう。ライン下りは、最盛期を迎えていた頃には自然の風景を満喫できることや、急流を下ることによる爽快感で毎年多くの観光客に親しまれてきた。しかし、近年においては表1にも示すように年々乗船客数は減少傾向にある。

そこで今回の施設設計において、美濃加茂市の重要な観光資源であるライン下りの復興を目指し、以前のライン下り施設とは異なるコンセプトを持つ新たなライン下り施設を提案することとした。今回の計画に際して選定した敷地は、図1に示すように国道41号線中濃大橋から東に200m程の位置にある美濃加茂市太田町の旧太田脇本陣付近とした。この敷地を選定した理由は、図2に示すように名古屋市と美濃加茂市をつなぐ主要な幹線道路である国道41号線を通る際、美濃加茂市への入り口となる中濃大橋から望める位置にあることであり、観光における美濃加茂市の新しい玄関口となることを狙った。また近隣地域には岐阜を東西に横断する国道21号線、中山道太田宿や日本八景にも選ばれた木曽川があり、既存の観光施設を生かした計画ができると考えた。

(1) 美濃加茂市の観光地

日本昭和村

「日本昭和村」は、岐阜県が事業主体となって設営し、運営を民間企業に任せるという「PFI方式」の施設として、平成15年4月16日に開業した。昭和30年代前半の里山をモデルにした園内には、森や川、棚田、茶畑、ホタルやメダカの生育する溪谷などに見事に再現されている。また、機織りや染色、木

表1 美濃加茂市の主な観光地と年間入場者数
(単位:千人)

区分	総計	日本ライン	日本	あのかも	中山道	前	平	あのかも
		下り	昭和村	文化の森	太田宿	公園	健康の森	
昭和50年	379	379
55	306	306
60	180	180
平成2	188	125	63
5	282	220	62
6	211	148	63
7	337	163	67	107	...
8	414	155	72	187	...
9	617	123	67	125	...
10	246	102	63	81	...
11	186	94	-	92	...
12	180	36	-	94	...
13	182	69	-	113	...
14	185	68	-	117	...
15	1667	16	1331	-	99	...
16	1624	28	1006	106	154	-	93	...



図1 旧中仙道太田脇本陣付近

クラフト、自然ふれあいツアー、カヌーなど、野外活動や農作業を気軽に体験できるさまざまな教室やイベントも充実している。大人には懐かしく、子どもには新しい、そんな日本のふるさとが満喫できる体験型テーマパークである。

The proposal of the facilities where it aimed at the reconstruction of nihon rhein
- Fusion facilities with the tourist industry and the citizen activities -

Kazunao SUGITA

みのかも文化の森

「森からはじまる新しい時代」をテーマに「みのかも文化の森」が平成12年10月にオープンした。

この施設は、郷土資料館の構想から始まっており、これに文化・芸術関連施設や教育センターを取り込み、全国にも類を見ない文化と教育の複合施設となっている。広大な森のなかに、ギャラリー・各種教室などがある「市民ミュージアム」と情報学習室・教育相談室などがある「教育センター」から成る建物と、自然や遺跡などの体験学習ができるコーナーが整備されている。

中仙道太田宿

尾張藩領地で代官所が置かれ、飛騨街道や郡上街道との分岐点で栄えた宿であり、今もなお太田宿全体が当時の風情を残す。

昭和30年代までは、太田の渡しやライン下りの出発地でもあり宿場町の華やかさがあった。今でも昔ながらの町並みも残っており、太田宿の脇本陣など昔ながらの商家など一見の価値がある観光がある。この中山道太田宿を活性化するためにボランティア団体である「中山道若衆会」がいろいろな事業を行っている。

旧太田宿本陣跡と本陣の門

敷地462坪、建坪227坪であり、建物の構造においても門、玄関、上段の間を備えるなど各所に本陣などの共通性を持っている。

旧太田宿の脇本陣跡

東側にある建物で、木材商で、宿屋 十一屋 林昌市郎の家である。西側に味噌溜造 庄屋 林市左衛門の家がある。

みのかも健康の森

「みのかも健康の森」は、岐阜県と美濃加茂市が共同で整備した森林レクリエーションエリアであり、平成7年4月に開園した施設である。この施設は人々が森林に入って自然を楽しむ休養機能を生かしつつ、自然と共存できることを狙ったものである。また園内には「喜びの塔」と呼ばれる展望台があり、中央アルプスが眺めることもできる。

2. 計画の提案

今回企画する施設のコンセプトとして利用者別に次に示す3つの施設の融合を掲げた。

(1)美濃加茂市を訪れる観光客向けの施設

木曽川とライン下りの様子を見渡すことが可能な眺望のよい施設と歴史ある街並みが残る中山道を紹介する施設を計画する。

タワー、展望施設、中山道太田宿関連の展示施設



図2 名古屋市と美濃加茂市を繋ぐ
主要な幹線道路



写真1 木曽川 日本ライン下り
美濃太田～犬山間 13Km



写真2 中仙道太田宿



写真3 旧日本ライン下り乗船場施設

(2)美濃加茂市民向けの施設

幅広い年齢層の人々が利用でき、憩いの場となる緑地公園、さらにその公園を利用する市民が気軽に利用することのできる施設を計画する。

多目的ホール、緑地公園、公園を利用する市民が気軽に利用することのできる喫茶店とカフェスペース

(3)国道41号線、21号線利用者向けの施設

国道41号線、21号線は車両通行量が多い上、道の駅などの休憩施設も少なく、運転者の疲労度も高くなることから休憩ができるような公共施設が必要であると考えられる。さらに美濃加茂市の文化・名所(名物)を知ることのできる観光情報施設としての役割も担う。

駐車場・トイレの基本的な休憩施設がある「道の駅」を計画する。

上述した3つのゾーンを敷地と周辺環境の関係性を考慮してゾーニングしたものを図3に示す。自動車利用者のアクセス方向である敷地北側に駐車場、道の駅を配置し、その反対側に市民向けゾーン、緑地公園、中央に観光客向けゾーンを配置した計画とした。

3. コンセプト

(1)建物本体

建物へのアクセスは多方向からとし、さらに外壁にガラスを多用することにより内部が認識しやすく建物内部に外部との連続性が生まれ、建物内部の人と外部の人との交流が生まれることが期待される。

また、建物内部に各室をつなぐ空間として外部に開かれた通路、水盤、芝生を計画し、公園さらにはその向こうの木曾川との連続性を感じられるような計画とした。

建物内観及び外観は川の流れをイメージしたデザインを随所に取り入れ、建物内部からの眺望、建物北側からの眺望において川のある景色との調和を図った。

タワー部分は川のさざ波をモチーフとした形態とし、この建物がライン下りの出発駅であることを主張し道路利用者からの観光的ランドマーク性と美濃加茂市のシンボル性を兼ね備えた形態とした。

(2)屋上緑化

ガラスを多用した建物であるため必然的に熱負荷が高くなるが、屋上緑化を行うことにより太陽光による熱負荷を下げ、さらに公園の芝生との一体感が生まれることを意図した。



写真4 現在の日本ライン下り乗船場

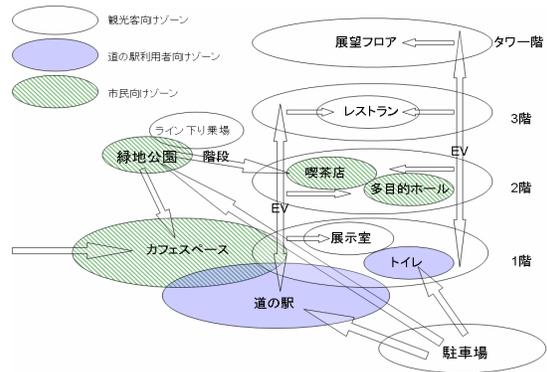


図3 階層別ゾーニング

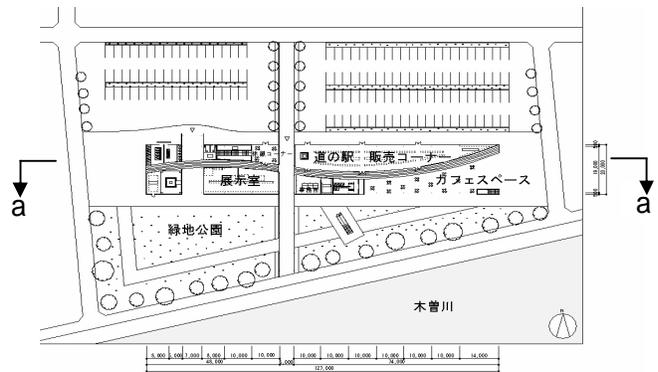


図4 1階平面図兼配置図

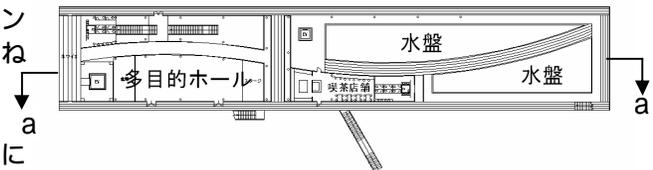


図5 2階平面図

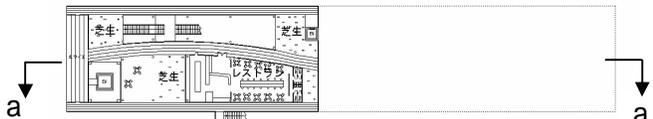


図6 3階平面図

(3)水盤

道の駅部分上部に設けた水盤により熱負荷が少なくなると共に、水盤を透過した太陽光のゆらぎが公園から続くカフェスペース、道の駅に降り注ぐことにより建物を利用する人々は水の存在を身近に感じられるよう計画した。

(4)ラインロード

施設中央部には建物を貫くガラスチューブを設け木曽川への軸線を明確にし、一直線の

通路を確保することにより動線が明確となりこの施設の「駅」としての機能を強調することを意図した。

4.まとめ

この提案は美濃加茂市の観光資源であるライン下りを復興させることを目的に計画を行った。以前存在したライン下り施設とは異なる新しいコンセプトを持つ融合施設となり施設の利用頻度が高く望まれる計画であると考えられる。



写真5 展望タワー 模型



図7 南側立面図

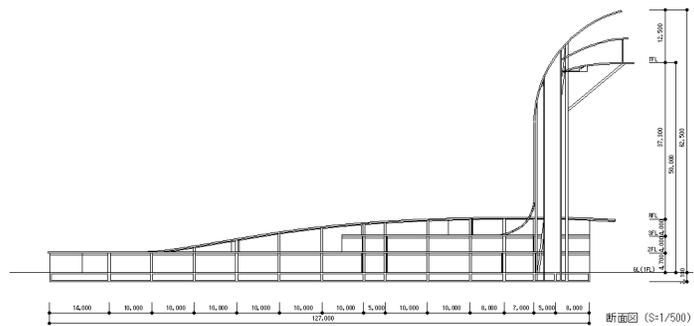


図8 a-a 断面図



写真6 提案施設の全体模型